

おくのしんたろう

奥野信太郎

1899年，東京生。慶応義塾大学文学部卒。慶応大学文学部教授。1968年没。

主著 『北京裸記』『日時計のある風景』『随筆東京』『中国文学十二話』ほか。

藝文おりおり草

東洋文庫 554

1992年9月10日 初版第1刷発行

著 者 奥 野 信 太 郎

発 行 者 下 中 弘

印 刷 株式会社 共立社印刷所

製 本 株式会社 石津製本所

電話編集 03-3265-0461 〒102 東京都千代田区三番町5
発行所 営業 03-3265-0455
振 替 東京 8-29639 株式会社 平 凡 社

© 株式会社 平凡社 1992 乱丁・落丁本は直接読者サービス係
Printed in Japan でお取替え致します(送料小社負担)

ISBN4-582-80554-X

東洋文庫
554

平凡社

藝文おりおり草

奥野信太郎

装
幀
原

弘

はしがき

我学界に於て中国文学に根拠する随筆家として奥野信太郎氏の存在は、中国学界に於て日本文学に根拠する随筆家周作人氏に相当するものと私は想ふ。私が奥野さんから其著「随筆北京」を贈られて読んだのは十八年の昔であり、私が北京に游学したのは、それよりも十数年前である。私も中国文学専攻であり、趣味も大体奥野さんと似寄つてゐるらしく、北京に対する好奇と愛着も多く譲らないつもりであるが、然し私の北京を語る文章は僅か二篇しか出来なかつた。それは私の筆不精のせりでもあるが、私には奥野さんのやうな緻密な観察力が無かつたからだと羨んだのである。

昨年また随筆「かじけ猫」を贈られて読んだ。是は前書に対して随筆東京とも云ひ得べき感じのものであるが、其中で二三篇はやはり北京のあたりを低徊してゐる。今回本書に集められた文章は主として中国文学に関する研究的論考であるが、それでも「集香居回憶記」は北京生活の追憶であり、「古燕日涉」は北京を探勝した遊行日記である。書中最も精彩有りと思はれる文学史的考証「北京時代の洪北江」の篇さへ、意識してか無意識にか、やはり北京を舞台にして演出されてゐる。奥野さんの脳裏を造次顛沛も離れぬものは北京であるらし

い。

失礼。かう云ふ言ひ方をする、いかにも奥野さんを北京通の随筆家ときめてしまつたやうで、読者の誤解を招く恐れが有るが、右は固より其の本領ではなく、無論奥野さんは我国屈指の中国文学者であり、本書は其の本領の一端を示されたものである。まづ「北京時代の洪北江」の如きは素晴らしい評伝であり、「中国演劇の諸問題」「遊仙窟訓読の伝説について」の如きは創見に富む新説である。「中国の鬼談」「中国の幽霊」「仙人と仙薬」諸篇は神怪小説の特質を究むる重要な問題として吾人の注目を引き、「伝奇漫録について」の一篇は安南本の短篇小説集の紹介であり、珍稀な資料として吾人の好奇心をそるに十分である。是等は文学史家として奥野さんの良史の才を窺ふに足るものであり、かうした述作をどしどし発表して頂きたいものと、望蜀の念に堪へない次第である。

洛北下鴨の守拙蓬廬に於て

青木正児 識す

目 次

はしがき(青木正児).....	三
北京時代の洪北江.....	九
随園の女詩人たち.....	三三
集香居回憶記―「影」の作者その他―.....	四三
中国演劇の諸問題.....	六二
1 巫風と調戯.....	六二
2 侏儒の系譜.....	八三
3 武技のころ.....	九七
魯迅の文章について―朝華夕拾を中心として―.....	一三三

魯迅故宅記	二五
詩人黃瀛のこと	三三
伝奇漫録について	一四
遊仙窟訓読の伝説について	一六
中国の鬼談	一七
中国の幽霊	一八
仙人と仙薬	一四
「金瓶梅」おぼえ書	一九
中国文学とわたくし	二〇
古燕日渉	二六
あとがき（奥野信太郎）	二五
解題（岡晴夫）	二五

藝文おりおり草

奥野信太郎

本書は、一九五八年五月刊の春秋社版による。

北京時代の洪北江

北京の町を歩いているとき、なによりもわたくしに親しく感じられることは、およそこの町のもっている表情が、五十年前以前も、あるいは百年以前も、やはり今日のそれと、それほどはげしい変りかたをしていなかったろうという心安らかさが、ごく自然に胸に流れこんでくれることである。なるほどその昔は、なだらかな流れに、柳のかげが樹深く美しいいろを溶かしこんでいたところも、いまでは索漠たる暗渠となってしまったような、また古い貴族の邸宅が取り払われて、そこがいつしか殺風景きわまる役所になってしまったような、そういう変遷は随所にみられるけれども、そのためにこの町の典雅な精神が、かたなしになってしまったという、そんな悲痛な気もちを少しももつことなく、あらゆる変遷をのりこえて、まず北京の表情を、嘉慶年間のそれであると考え、乾隆年間のそれであると考え、乾嘉の詩人洪北江が、かつてこの都城に住んでいたときに、その詩と生活が、北京の空をわたる風や月のひか

りや、四季それぞれの花のいろや、そういうものとどんな調和を示していたらうか、ふとそんなことを考えながら、わたくしは、自分の文学地図の一隅の地域として、打磨廠や琉璃廠の通りを、しばしば彷徨するのであった。

洪北江がはじめて北京の地を踏んだのは、乾隆四十四年、ちょうど三十四歳の五月であった。かれは詩友黄景仁の寓に、一時旅装を解いたのである。当時黄景仁は、城南法源寺の西齋で、病を養いつつ、詩作に精進を続けていた。法源寺は广安門大街の南、門楼胡同のまた南にある巨刹で、丁香花の季節には、その花の美しさをもって、ことに名のある淨域である。土牆に沿うて中門にいたるまで、その静かな路の幾曲り、どこか法隆寺附近の温藉な風景を想いおこさせる。年譜によると、間もなく黄寓を去って、孫溶延の家にその居を定めたらしい、孫溶延は四庫全書の総校であったから、寄寓した洪北江は、その為事の手伝をして、経済的な援助をうけることとなったのである。孫宅は前門外打磨廠にあった。打磨廠は前門から崇文門まで続く、かなり長い通りであって、もし正陽橋畔を左折東進すれば路南の刃物屋の異様な店飾りと、旅店の多いのにちょっと驚かされる。やや曲折してはいるが、大体においてまっすぐに東西に通じている通りであるといつてよからう。もし崇文門外を右折西進すれば、正陽橋畔を左折東進するより、はるかにもの静かな町のおちつきを感じるであらう。つまりこの通りは、崇文門外のほうから進めば次第に賑やかになり、前門外のほうから進め

ば次第に寂しくなるといえば、早わかりがする。路北に二酉堂と招牌を掲げた一書肆がある。ただし鬻ぐところの書籍は、粗悪な習字手本や唱本の類であって、往昔琉璃廠にその名を轟かした書肆二酉堂でないことは明かである。このあたりは古風な、おちついた屋並が建ち続いている。洪北江が寄寓した孫宅が、打磨廠のどのあたりかは分明しないが、もし想像するならば、あの刃物屋や旅店などの雑踏に近いほうよりは、すくなくとも二酉堂に近いほうの、おちついた場所であったのではあるまいか。おそらく乾嘉の昔から、正陽橋寄りには賑やかであり、それから遠のくほど静かになっていったことには、変りはなかったらうと思われるからである。

孫宅にあって、洪北江の営んだ生活は、まさに奮闘努力の一語に尽きるといってよい。孫溶延から得る報酬一年二百金のうち、その半ばを割いて、これもやはり当時上京していた仲弟の生活費にあて、残る半ばは郷里に送金していた。したがってかれ自身の生活そのものは、困苦欠乏、その極に達していたことであつた。ことに仲弟が病を得て、不幸、咯血してからは、衣類を典してこれを助けるの余儀なきにいたつた。おりしも乾隆帝南巡後、諸臣に命じて賦を献らせることがあつた。たまたま尚書梁国治のために、頌賦十八章の代作をしたことが評判となつて、代稿の依頼が少なからずあり、二月から七月までの短期間に、執筆五六十篇、得るところも四百兩を超えたので、弟にも十分な療養をあたえ、負債もことごとく完済

することができた。しかも一方、日に八冊ずつの校合と、数十カ条の精緻な考証をやっていたというから、その精力にはまったく敬服せざるを得ない。

この孫宅時代の北京生活は、「巻施閣集巻一・巻二」の諸作にこれを窺うことができる。この間かれはしばしば城南天橋に赴いて痛飲の快をほしきままにしている。いまでこそ天橋は、塵埃裡の雑踏で、つい数年前までは盜賊市場などと称せられていたが、そのころは清流の水涼しく、悠然として酒盃をふくむにふさわしい風雅の地であったことは、「青郊 三里の月、紅燭一杯の春」とか、「門を出でては万古の愁を逐わず、いささか高閣に上って吟眸を開く」とかいう詩句によって察せられる。さらに「壇雲 窓に入って暗く、山鳥 楼に上って馴る」、あるいは、「咫尺す郊壇の外、春雲すべて龍に似たり」。またあるいは、「客に伴って、時に春のきたるあり、城門楼上 春陽滿つ」等の詩句から、天壇の森の野鳥がしばしば酒樓の窓を訪れ、永定門にさす春の光の滴りと、柔かい季節の雲の揺れ動きとが、酒味の好を加えたことも想像に難くない。しかしまた、病ようやく篤きに赴きつつあった詩友黃生を、法源寺に訪れて、「故人 病を抱いて西齋におる。瘦影亭々日に三たび至る」といい、「今年花盛んにして、病また盛んなり」といっている詩句に接すると、凄愴の気は特にはなはだしい。法源寺の花というのは、いまでこそ丁香であるが、そのころは海棠花が美しかった。そしていまは牡丹をもって鳴る崇郊寺が、むしろ丁香花の名どころとして聞えていた。

このことも北江の詩によって知られる事実であるが、謳われる花の身の上に、こうした変遷のあることは、まことに興深いことである。法源寺を訪れて、黄景仁のいた西斎というのは、どの辺のところであろうかなどと、臆測を逞しくするとき、花も変り、人も変ったという感慨が、ひとしお哀愁をそそるかに胸を衝く。

第一次の淹留は、約二十三ヶ月続いた。孫宅は打磨廠から、これもすぐ南の小巷、賈家胡同に移ったが、そのとき洪北江も共に移居した。したがって、かれと孫宅との因縁はきわめて深いものがあつた。この間、江蘇陽湖生れのかれの郷音も、いささか北京音に習熟したことはあろうが、これとて、やはりいまと同じく、促音の多いかれの言葉を聞いて、京油子（ギョウアブシ）の誰彼は、「南方人」なる呼称をもつて対したにちがいない。

かれはまさに「南方人」である。そして北京における洪北江の詩を通じて、もっともわたくしを感動せしめる一事こそ、この南方人であるかれが、常住坐臥、故郷の人を思い、郷土の風物を恋うる一念に徹していたことである。すくなくとも北京における洪北江を、一言にして尽すならば、それは懷郷の詩人としての姿であらう。

試みに開卷第一「夢に外家の南楼に入り、覚めてのち感あり、内弟阿魁・阿愚に寄す。四首」を誦するならば、思い半ばに過ぎるものがあることと思ふ。

乾隆四十六年四月、洪北江は第一次の北京生活から離れて、西安に向つた。その際、平生

弟のごとく親しんでいた黄景仁と別れることは、もっとも忍び得ざるところであった。その留別の詩句に「才人命の薄きこと君のごときは少なし」、あるいは「君のいまだ死せざるに重ねて相見んことを期す」等の語をみることは、その心情の悲痛の深切を覚えて、ほとんど卒読にたえざるものがある。翌年春、黄生は西安に北江を訪い、開元寺に寓して三月の日子を過ごした。こうして留別の詩意に添うたのであったが、さらにその翌年、すなわち乾隆四十八年五月、再起の不能を自覚した黄景仁は、病勢を冒して北京を出発、太行山を越え、雁門に出で安邑までたどりつき、ついにその地で逝世したのであった。洪北江は西安から安邑まで四昼夜、騎乗の旅を続けて馳けつけた。

かれに後事を託した遺書のほか、数枚の名刺と帽子が一つ、遺品はただこれだけであった。寂然たる死後である。「水のほとりに低き塚をしつらえ、その好める竹を植えんかな」と歌い出でた洪北江の心には、亡友を憶う悲しみ以外、なにもものもなかった。この同じ年、はからずも黄鶴楼に登臨して、その壁間に黄生の筆蹟をみたとき、また太白楼を望見して、かつて顧文子・黄景仁の二亡友とここに遊んだことを追憶したとき、かれは慟哭をそのまま詩に写したのである。「君見ずや偕遊の少年　ことごとく客死せるを」の一句は、けだし千万の言にまさって衷情を吐露したものといつてよからう。

第二次・第三次・第四次の北京生活は、いずれも短期間であった。これはことごとく礼部

の会試に應ずるための上京であり、しかも考試の結果は、みな不幸にして選にあたらなかった。第二次、すなわち乾隆四十九年は二月から四月までの滞在で、泡子河觀音寺の繆汝和の居に寓した。第三次すなわち五十二年は正月から五月まで、また第四次すなわち五十四年は二月から五月まで、これはいずれもとも親しい詩友孫星衍の居に寓した。ただし五十二年には、孫星衍は宣外繩匠胡同に住んでいたが、五十四年に上京した際には、琉璃廠に移り住んでいた。繩匠胡同は広安門大街の南、現在は丞相胡同の名をもって呼ばれている、南北に走る巷路であり、琉璃廠は広安門大街を隔ててその東北にあたっている。菜市口の近所から南折して、一たび丞相胡同に入れば、間もなく物売る店が姿を消して、もの静かな邸統きの町となる。やはりこのあたりの常として、中州新館や太平會館など、ところどころに會館の門がみえ、胡同のなかほどはいたって路幅も広く、大きな槐樹が枝を張って茂みをつくっているあたり、ときどき小販の車が荷をとどめて、ささやかな食べものや飲みものなどの商売をしている。西に平行する北半截・南半截胡同とは、さらに小巷が、東西にわたってこれを接続する。琉璃廠はここから歩いて十分とはかからない距離にあるが、東西にわたる比較的広い地域であるから、孫星衍が居を構えていたのが、多分この辺であつたろうという空想をほしいままにすることには、やや不自由であるけれども、いまは書肆の立ちならぶ表通りを、大きな扇子で日を遮りながら、ゆっくり歩いてくる風雅な人などに会おうと、乾隆の昔